

埋葬形態から見る植民地時代の社会変化
——ペルー北部高地タンタリカ遺跡の事例——

渡部 森哉・峰 和治

要 旨

南米アンデスに地域に台頭したインカ帝国は 16 世紀にスペインによって征服された。その後、スペインの植民地支配の下で、キリスト教の布教活動が進められた。本稿はアンデス先住民のキリスト教化のプロセスがどのように始まったのかを、ペルー北部高地タンタリカ遺跡の発掘データから考察する。インカ期アンデス山地では、チュルパと呼ばれる地上式の塔状墳墓の中に体を折り曲げたミイラを複数安置する習慣が広まっていた。そして埋葬には土器をはじめとする副葬品が伴った。植民地時代初期には手を折り曲げ胸の前で交差させた伸展葬というキリスト教式の埋葬が始まり、土器をはじめとする副葬品は用いられなくなった。しかし、死者の口の中に銅製品を入れるなどの先スペイン期からの習慣の一部も存続した。人骨の特徴は全体的に先住民系の特徴を示しており、ヨーロッパ系の人々が移住してきたのではなく、アンデスの人々がキリスト教を受容したと考えられる。一般に植民地時代のアンデスでは、山地よりも海岸地帯で変化が早く進んだ。タンタリカで植民地時代初期にすでにキリスト教が広まっていたのは、山地にありながら海岸系の人々が中心になって利用していた場所であったためと考えられる。今後、他の遺跡のデータ、および植民地期の史料と比較検討し、植民地初期の社会変化を理解する必要がある。

キーワード

アンデス、ペルー、インカ帝国、スペイン、植民地時代、墓、チュルパ、キリスト教

1. はじめに

人間は誰でも死をむかえる。そして死者の体は何らかの方法で処理される。墓という物質的装置の中に遺体が安置される場合もあるし、遺体が完全に破壊されて何の痕跡も残されない場合もある。当然だが、考古学的に検証できるのは物質的な証拠がある場合に限定される。

本稿の目的は中央アンデスを事例として、16 世紀のスペインによるインカ帝国の征服後、土着社会に生じた変化を考察することにある。植民地時代についてはこれまで主に歴史学の分野を中心に研究が行われてきたが(*cf.* 網野 2008)、本稿では特に埋葬形態に着目して、考古学データを基に考察する。以下ではまず先スペイン期アンデスの最終期に当たるインカ期の埋葬形態について概略し、その後具体的発掘データを提示する。最後に、植民地時代の社会変化について考察を加える。

2. 先スペイン期アンデスの埋葬形態

先スペイン期アンデスの最後に登場したインカ帝国では、どのような埋葬形態が見られるであろうか。15世紀から16世紀にかけて台頭し、南北4000 kmという広大な範囲の約1000万人という住民を支配下に治めた南米最大の帝国の頂点に君臨するインカ王の墓は、さぞかし荘厳であったろう。そのように考える人がいるであろう。ところが、意外に思われるかもしれないが、インカ王の墓は作られなかったのである。インカ王の遺体はミイラにされ、各インカ王の親族集団によって管理され、儀礼の際には担ぎ出されて広場に置かれた(Hampe Martínez 1982; ピサロ 1984(1571))。インカ王の親族集団はパナカと呼ばれ、インカ王が即位する時に新しく創設することになっていた。そして新しい王の即位に伴い形成されたパナカは、前代のインカ王のパナカと置換されるのではなく併存するため、つまりインカ王のミイラがある限りパナカは存続するため、その数は次第に増大した。その結果、スペイン人が侵入した時には10以上のパナカが、首都クスコに存在した。

ではインカ王以外の人々の墓はどうであろうか。インカ期にはアンデス高地でチュルパと呼ばれる地上式墳墓が広く認められる(Isbell 1997)。それはしゃがんだ状態、体を折り曲げた形で布を巻き付けてミイラにされた遺体を入れるための墓である(図1)。集合墓であり、



図1 プエブロ・ビエホ遺跡のチュルパ

一基のチュルパに多くのミイラが安置された。例えばペルー北部カハマルカ地方では、チョコタ遺跡、プエブロ・ビエホ遺跡、タンタリカ遺跡などで確認されている(図2)。ただしチュルパはインカ期に限定されるわけではなく、ヘケテペケ川上流に位置するパレドネス遺跡などでは少なくともワリ期(A.D. 600-1000)の後半に遡ることが確認されている(渡部 2007a)。また、チュルパを建設するのではなく、マチャイと呼ばれる洞窟にミイラを安置する埋葬形態もインカ期の特徴であり、例えばマチュピチュ遺跡では斜面にある洞窟で多くのミイラが確認されている(Burger and Salazar (ed.) 2003)。

一方、海岸地帯ではチュルパは確認されておらず、ミイラは地下に埋葬された。リマ市内のインカ期の墓地遺跡プルチューコなどが有名である(Haun and Cock Carrasco 2010)。また山地でも、床下に埋め込まれた儀礼的埋葬が確認されている(Julien 2004)。

以上のようにインカ王の墓は存在しないが、インカ期には墓が作られているため、考古学的に検証できる。また遺構としての墓の他に、土器をはじめとする副葬品が遺体に伴うことが多い。そうした遺物の特徴により墓の時代を特定できる。特にお酒を入れるための長頸尖底壺¹がインカ期の典型的な土器であり、ほぼ全てのインカ期の遺跡で確認でき、墓に伴う場合が多い。

¹ ギリシアの油入れとの形状の類似から、アンデス考古学では「アリバロス」と呼ばれる。

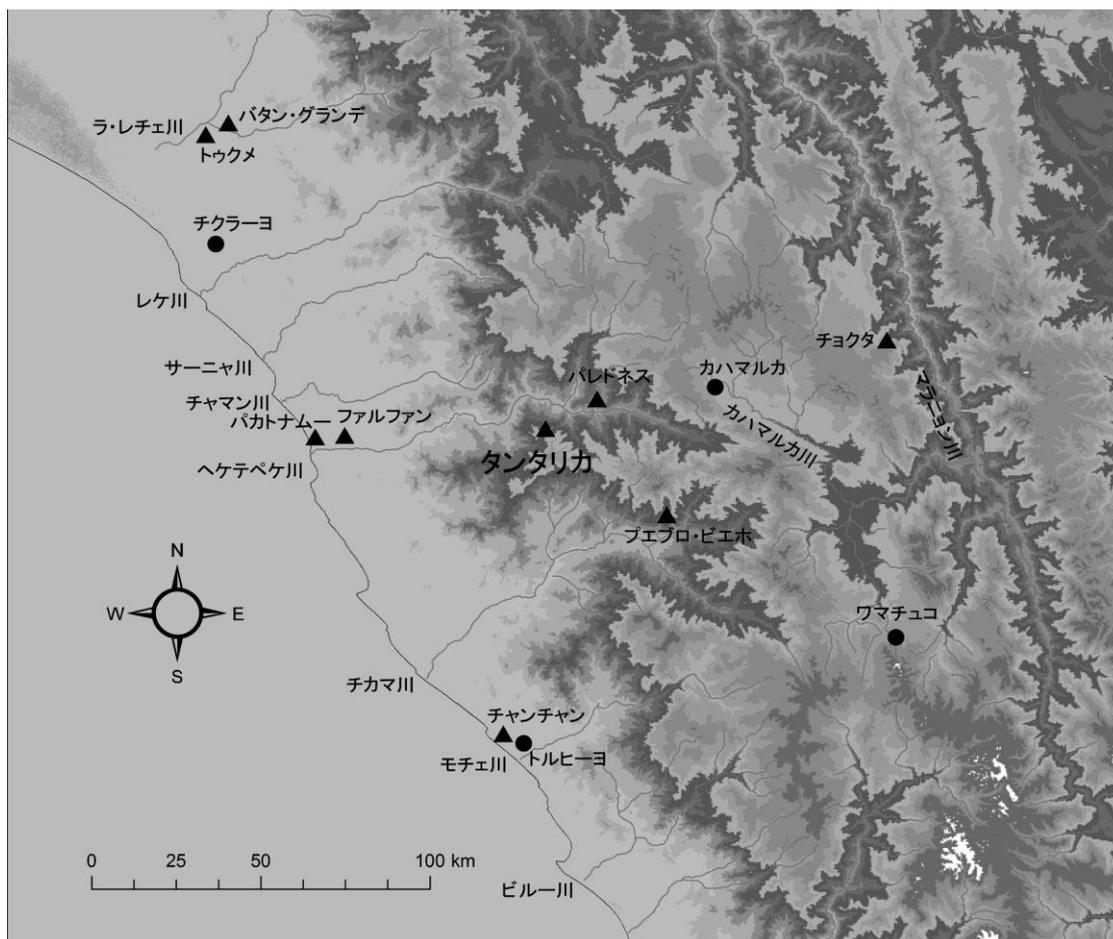


図2 ペルー北部の遺跡(▲遺跡、●現在の町)

こうした先スペイン期の墓は、現在遺跡として確認できる。しかし現在のアンデスの住民はそのような墓は利用しておらず、殆ど全てがキリスト教のしきたりに従って埋葬を行っている。こうした状況は、16世紀にスペインによる植民地支配が始まり、アンデス先住民が支配下に置かれた時から生まれていった。400年以上の時間の中で、キリスト教化の流れは着実に進んでいった。現在のアンデスの住民の多くは、自らを正当なカトリックとして認知し、先スペイン期の遺跡を「ヘンティレス」、即ち異教の人たちのものとして取り扱う。アメリカ合衆国などでは、遺跡は先住民と連続的に繋がっているのであるが、アンデスでは奇妙なことに、両者の間に大きな断絶がある。だから現地の人々が、自分たちの祖先との繋がりを主張して、遺跡や墓に対して権利を申し立てることはない。あるのは住んでいる場所、土地を介しての権利であり、先スペイン期の遺跡が自分たちの祖先のものであるというロジックが使われることはない。このような断絶が生まれた背景を理解するため、本稿では植民地時代初期に焦点を当て、キリスト教化の流れがどのようにして始まっていったのかを考察したい。

以下ではインカ期の埋葬形態が、スペイン人によってインカ帝国が征服された後、どのように変化したのか、あるいはしなかったかを、タンタリカ遺跡を事例として検討する。

3. タンタリカ遺跡の発掘

タンタリカはペルー北部高地カハマルカ地方西部に位置する大遺跡である。一つの山の頂上部から南東斜面、麓まで建築が連なっており、山の頂上部の標高は3289 mある(図3; 図4)。

1999年、2000年、2004年に同遺跡で発掘調査を実施した²。調査の目的は、インカ帝国の支配下に組み込まれた在地の社会にどのような変化が生じたかを解明することにあつた。調査の結果、タンタリカはペルー北海岸を中心に台頭したチムー王国(A.D. 850-1470)の支配下で建設が始まったこと、インカ帝国によるチムー王国の征服後も再利用されたこと、植民地時代初期まで利用されたことが確認された(Watanabe 2004; 渡部 2010)。

カハマルカ地方には、インカ期に7つのワランガから構成される行政単位があつた。ワランガとはインカ帝国における公用語であるケチュア語で数字の「千」を意味し、納税をする成人男性を数える単位でもあつた。7000人の納税者がおり、一家族5人と計算すれば、35000人の人々が生活していたことになる。タンタリカ遺跡の調査は、インカ期の7つのワランガという単位が、インカによる征服前にカハマルカ地方にあつた政体を基準としているかどうか、つまり先インカ期からインカ期にかけてどれだけ連続性があるのか、あるいは逆に断絶があるのかを解明する目的で実施された。調査の結果、インカ帝国による征服以前、カハマルカ地方西部には、タンタリカ遺跡に代表されるように海岸系の文化が広まっており、東部のカハマルカ川流域を中心に繁栄した、カオリン土器製作に特徴付けられる山地系のカハマルカ文化とは全く異なることが明らかとなった。インカ帝国の行政単位であるカハマルカの範囲内で、インカによる征服以前には等質の文化が広まっていたのではなく、西部と東部では全く異なる文化が存在した。このことからカハマルカという行政・民族単位は、インカの支配下で人間集団が大規模に再編成された結果と考えられる。本稿の主眼は、インカ期から植民地期への変化に置かれているが、タンタリカ遺跡は先インカ期から植民地時代初期への通時的変化を捉えるのに適当な遺跡であるということ、そして山地にありながら海岸系の人々が中心になって利用したということを明記しておきたい。

タンタリカはチムー王国が山地を支配するための拠点と考えられる。ペルー北海岸のモチェ川流域に位置する首都チャンチャンを構えるチムー王国は南北に支配域を拡大した。そして北のヘケテペケ川下流まで進出したのは、キャロル・マッキーによれば、A.D. 1310-1320(Mackey 2010; Moore and Mackey 2008: 789, 802)であるという。ヘケテペケ川下流に位置するファルフアン遺跡では、ランバイエケ期(A.D. 1100-1300)、チムー期(A.D. 1300-1460)、インカ期(A.D. 1460-1535)と時期区分されている。タンタリカ遺跡はヘケテペケ川上流域に位置するため、その建設の始まりはファルフアンよりも後で、早くとも14世紀以降と想定できる。ただしアンデスにおける支配は、土地を媒介として行われるのではなく、あくまで対人関係であるため、支配域が不連続になる場合もあることを考慮する必

² 1999年、2000年の調査は、クントゥル・ワシ遺跡の調査プロジェクトの一部として発掘許可が取得された(ディレクター: 大貫良夫)。また科学研究費補助金のプロジェクト(研究代表者: 加藤泰建)の一部として調査を実施し、高梨財団から研究助成を受けた(研究代表者: 渡部森哉)。2004年の調査は単独の調査として発掘許可を取得し(ディレクター: 渡部森哉)、科学研究費補助金(特別研究員奨励費)によって実施した。

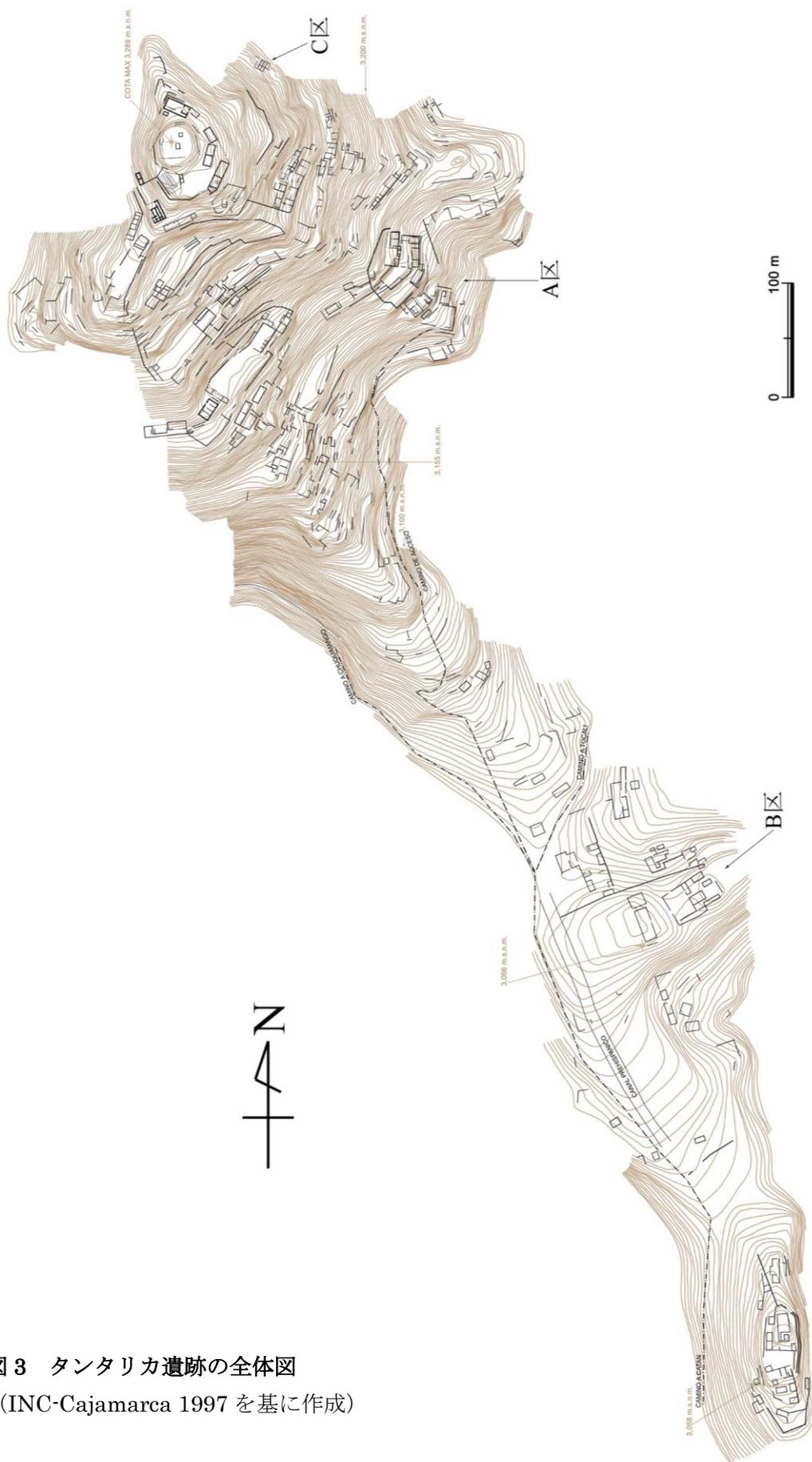


図3 タンタリカ遺跡の全体図
(INC-Cajamarca 1997 を基に作成)

要がある(渡部 2007b)。また太平洋側からタンタリカへはヘケテペケ川沿いに登るルートの他に、その南のチカマ川から至る道もあるため(Cobo 1964(1653): 127)、必ずしもヘケテペケ川下流を通らずとも到達することができる。

1999年には山の中腹部のA区、山の麓のB区で発掘を実施した(図3)。2000年には両発掘区の調査を継続するとともに、頂上付近にC区を設定した。その結果B区では植民地時代の建築、および墓が検出された。またC区ではインカ期の墓とおそらく先インカ期の墓が検出された。A区では墓は確認されていない。またC区では2004年にも発掘を継続し、さらに二次埋葬の墓が検出された(渡部 2005)。以下ではC区で検出された先スペイン期の墓と、B区の植民地期の墓について記述し、比較する。ただし人骨の分析がなされていないため、2004年のC区の墓のデータは扱わないことにする。

3-1. 植民地時代の墓——B区の発掘

タンタリカ遺跡の主要建造物は斜面に位置している(図4)。一方、南東側の麓の平らな場所にも建築が確認できる(図5)。そのため山の中腹部の建築群と麓の建築群は性格が異なる想定し、比較対照するためにそれぞれ発掘区を設定し、A区とB区と命名した。発掘の結果、山の麓にある建築は先スペイン期ではなく、植民地時代に属するということが確認された。以下では西から東にむかって各建築ユニットを記述していく。



図4 タンタリカ遺跡A区の建築群

「主部屋」

「主部屋」の周辺では160 m²に及ぶ範囲を発掘した。また、「主部屋」の西側を「入口テラス」、東側を「主テラス」と命名した。

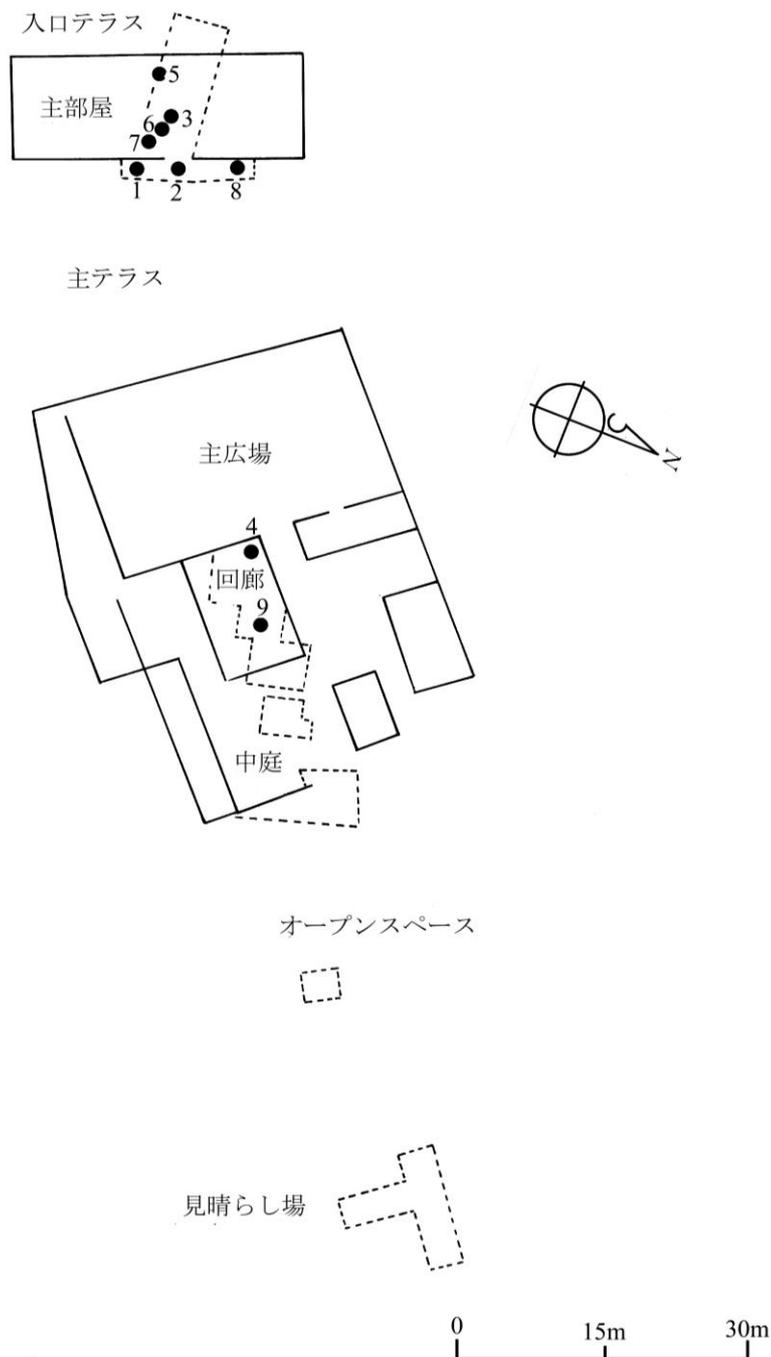


図5 タンタリカ遺跡B区の建築

●墓の位置 (1~4は1999年発掘、5~9は2000年発掘)

「主部屋」の構造は、31 x 10 m の大きさで、長軸は北西-南東の方向を持つ。覆土から植民地時代の土器が出土するため、「主部屋」は植民地期に建設されたと考えられる。長軸をなす壁にはそれぞれ幅約 2 m の窓状開口部³があるが、ある時期封鎖された。開口部の両端には内側に突出部と水平方向に空いた四角形の穴を伴うが、それらは扉を据えるための特

³ 短軸をなす壁の周囲を発掘していないが、そこに出入口があった可能性がある。今後確認が必要である。

徴と考えられる。また、「主部屋」の外側には窓状開口部の両側に、内側に向かって張り出しがあることが確認された。こうした設計は先スペイン期の建築には認められない植民地期の建築の特徴である。一方で、溝を深く掘り込み壁を岩盤の上に立てるという特徴は、先スペイン期の建築と共通する。

墓を覆う土からは、先スペイン期の土器とは異なる植民地時代の土器が出土した。それらは細かい混和材を用いる点、釉薬が用いられた例、轆轤の痕跡を伴う例があることなどから、明確に識別できる。また、建物の特徴、そして墓が建物の建設後に掘り込まれたことは明らかであるので、これらの建築に伴う墓は植民地時代のものとして間違いない。

「主部屋」周辺で検出された墓の取り上げに手間取り、建造物の全体構造を確認することはできなかったが、その大きさと、墓が多く確認されていることから、小さい教会あるいは礼拝堂であった可能性を想定している。この建築の性格は今後、他の地域の事例と照らし合わせて確認する必要がある。また東側の「主テラス」は開けた空間であるため、「主テラス」のさらに東に連なる建造物は、「主部屋」から離れ、独立して存在しており、建築の軸も異なっている。

発掘では計7基の墓が検出された。うち4つ(BTM3⁴、BTM5、BTM6、BTM7)は「主部屋」の内部で確認された。BTM3は成人の男女と新生児の計3体、それ以外はいずれも各墓に1体が安置されていた。残り3つ(BTM1、BTM2、BTM8)は「主部屋」外側に確認された。BTM1、BTM2はそれぞれ1体安置されていたが、BTM8は墓穴だけで遺体はなかった。これらの墓の位置から判断すると、これらは全て「主部屋」の建設の後に作られた墓である。しかし建物の建設と墓の建設の間にどれだけの時期差があるかは不明である。つまり建物が建設された後に墓地として再利用されたのか、あるいはそもそも墓のために建設された建物であるのかは分からない。後の時代の盗掘により荒らされており床面の認定が難しかったが、墓の上に崩壊した壁石が積み重なっていることから、建物の放棄前に墓が掘り込まれたことは確かである。また、少なくとも「主部屋」の外側にある墓は、3つ並んでいることから同時に埋められた可能性もある。それぞれの埋葬の特徴は以下の通りである。

BTM1(図6)



図6 B区第1号墓(BTM1)

発掘が始まってすぐに検出された。作業員が胴体の骨を取り上げてしまい、頭骨のみが残存している状態で確認された。おそらく屈葬で、頭は北向き、顔は東を向いていた。小児であり性別は不明である。口の中にピンセット形の銅製品を含んでいた。

⁴ BTM3はB区第3号墓を意味する。TMは墓の略号である。

BTM2(図 7 ; 図 8)

壮年女性の墓で、墓坑は石で縁取られていた。屈葬で頭は北向きである。腕を胸の前で交差させ、さらに足を折り曲げ、屈葬で仰向けになっていた。伸展葬でなく屈葬という体位は、先スペイン期のミイラと同様である。口の中に銅製品が 1 点あったが、腐食していたため原形は不明である。

この墓の覆土から出土した炭化物は、 310 ± 100 B.P.(未補正、測定機関番号 Tka-12017)の年代を示した。補正曲線 SHCal04(MaCormac et al 2004)を用いて、OxCal v.4.0.1(Bronk Ramsey 1995, 2001, 2006)較正プログラムで年代較正をすると、 1σ で 1484-1674 CalAD(55.0%)、1740-1798 CalAD(13.2%)、 2σ で 1447-1815 CalAD(86.3%)、1830-1892 CalAD(35.9%)、1921-1952 CalAD(3.1%)という値となる。植民地時代の墓と解釈して矛盾はない。

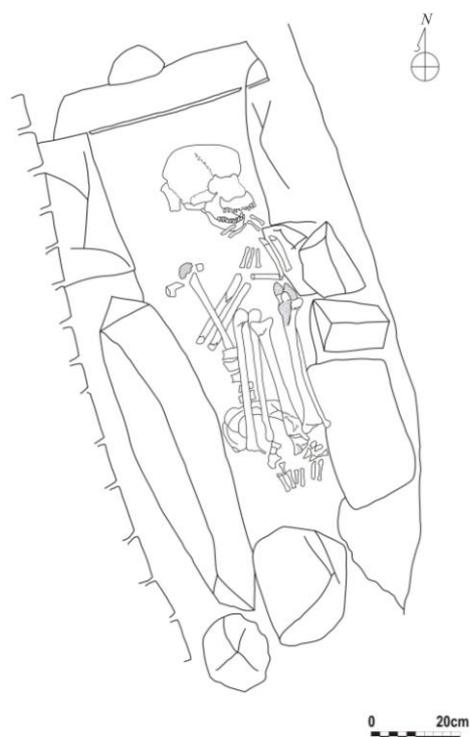


図 7(左) B 区第 2 号墓(BTM2)

図 8(右) B 区第 2 号墓(BTM2)平面図

BTM3(図 9 ; 図 10)

簡素な土坑墓であり、墓坑は石や粘土で縁取りはされていない。壮年の男女が頭を北に向け、胸の前で手を交差させた伸展葬で、さらに女性の胸の上には新生児の骨があった。男女とも口を開けた状態であった。男性のあごの部分には薄い銅製板が付着しており、胸の上には銅製品が 1 点あったが、腐食しているため原形は不明である。女性に副葬品は伴っていなかった。



図9(左) B区第3号墓(BTM3)



図10(右) B区第3号墓(BTM3)平面図

BTM5(図11; 図12)

楕円形に掘り込まれた墓坑で、南北に長い。壮年男性の墓で、北に頭を向けた伸展葬であった。口を開けた状態で、手を折り曲げ胸の上に乗せていた。副葬品は伴っていなかった。

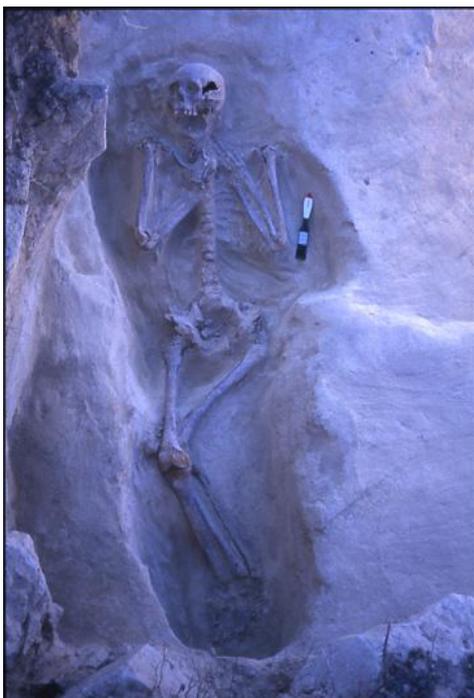


図11(左) B区第5号墓(BTM5)

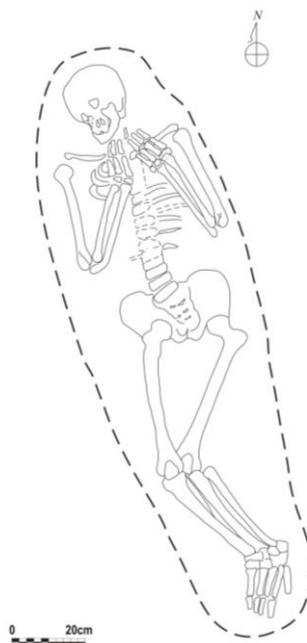


図12(右) B区第5号墓(BTM5)平面図

BTM6(図 13 ; 図 14)

焦茶色の粘土ブロックで囲まれた長方形の墓坑で、南北に長い。北に頭を向けた伸展葬で、手を折り曲げ胸の前で交差させ、口を開けていた。壮年男性である。



図 13(左) B 区第 6 号墓(BTM6)

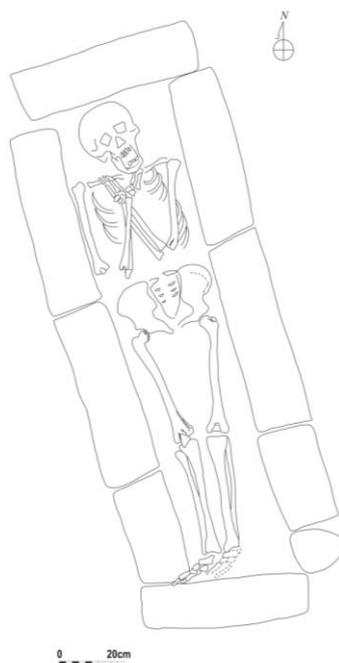


図 14(右) B 区第 6 号墓(BTM6)平面図

BTM7(図 15 ; 図 16)

墓坑は南北に長い楕円形の掘り込みである。伸展葬で頭を北に、顔を西に向けていた。若年男性である。他の墓の遺体と異なり、腕を胸の前で交差させておらず伸ばしている。残念ながら発掘作業の途中で、頭骨が何者かによって持ち去られてしまい、下顎しか回収できなかった。



図 15(左) B 区第 7 号墓(BTM7)

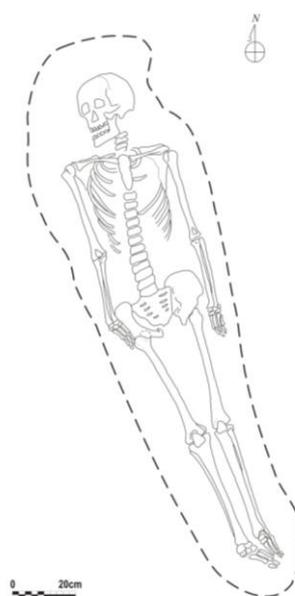


図 16(右) B 区第 7 号墓(BTM7)平面図

BTM8(図17)



焦茶色の粘土のブロックで縁取った長方形の墓坑のみで、内部に遺体はなかった。遺体がなかったことの意味については後述する。

図17 B区第8号墓(BTM8)

「主部屋」で確認された墓の遺体の殆どが、胸の前で腕を交差させている。その埋葬形態から、キリスト教を受容したことは明らかである。建物およびそれに共伴する土器の特徴から、これら一連の構造物が植民地時代のものと解釈したが、墓の特徴からも裏付けられた。また植民地時代に建設されたことは間違いないのであるが、腕をまっすぐ伸ばした BTM7 や、屈葬で埋められた BTM2 のような事例もあり、キリスト教式の埋葬が均一に、同時に始まったのではないということも分かる。いずれの墓も土器などの副葬品を伴っていないことが、先スペイン期の墓と異なる特徴を示している。一方で口の中に銅製品を入れるという先スペイン期からの習慣が存続していたことも明らかである。

「主広場」

「主部屋」の北東側には広場を中心とした建築物が広がっている。「主広場」は一辺が 30 m 四方の大きさの広場である。この広場の東西が 1 段高くなっており、西側には幅 1 m の階段が 2 つ、東側には幅 3 m の階段が 1 つある。表面観察から、広場のコーナーも開いており、アクセス可能であったと考えられる。

この広場は先スペイン期アンデスに遍く認められる半地下式広場に表面上類似するが、広場は先スペイン期だけでなく、植民地期における町の設計の特徴でもある。スペイン式の町の中心には必ず広場があり、その周囲を建物を取り囲む。従って広場の有無だけでは、先スペイン期か植民地期かを決定することはできない。しかし東側に連結された一連の建築物に共伴する土器が植民地時代のものであるため、「主広場」も植民地時代に建設されたと考えられる。

「回廊」

「主広場」のさらに東には回廊状に連なった小部屋構造が位置する。「回廊」は 7 x 3 m の大きさの空間である。中央部付近には、石で側面を縁取られた直径約 50 cm、深さ 90 cm 円筒形の穴がある。こうした穴はタンタリカ中腹部の A 区でも確認されている。また、「回廊」

の東部にはステップがあり、これを上ると東の「中庭」に抜けることができる。

1999年に床下から地下式墓室 BTM4 が検出された。墓室の方向が「回廊」の壁の方向と平行であり、墓室の上を床面が通っていることから、「回廊」と墓は同時期に建設されたと考えられる。2000年には建築と墓の対応関係を調べるため、「回廊」のほぼ全面を発掘したが、BTM4 がある「回廊」の北西隅と線対称の位置にある南西隅には同様の墓室は確認できなかった。また、「回廊」東部にはもう1つの墓 BTM9 が検出された。

BTM4(図 18 ; 図 19 ; 図 20)

石組みの地下式墓であり、東西方向に長い長方形で、墓室の広さは 2.2 x 1 m、高さ 1 m である。墓室内には棺に用いられたと思われる鉄製の釘が散らばっており、植民地期以降の墓であることは明らかである。

墓の建設順序は次のようになる。墓室の中にまず角石が敷き詰められ、次に細長い梁石

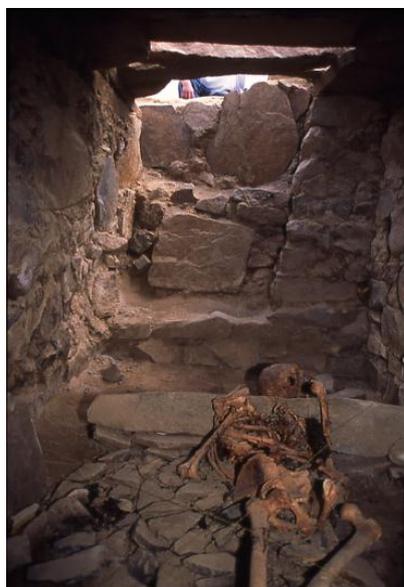


図 18 B区第4号墓(BTM4)

が 2 本置かれ、その上に木製の棺が置かれた。西に頭を向けた伸展葬で、腕を胸の前で交差させていた。人骨の特徴から埋葬されていたのは壮年(25-30 歳)の女性であった。副葬品はなく、ボタンなどが確認された。発掘時には木は朽ち果て一部しか残っていなかったが、鉄製の釘が周囲に分布していた。棺桶の一部であると思われる木材を年代測定したところ 430±120 B.P.(未補正、Tka-12016)の年代を示した。補正曲線 SHCal04(MaCormac et al 2004)を用いて、OxCal v.4.0.1(Bronk Ramsey 1995, 2001, 2006)較正プログラムで年代較正をすると、1σで 1432-1632 CalAD(68.2%)、2σで 1301-1366 CalAD(3.6%)、1375-1696 CalAD(85.3%)、1726-1807 CalAD(6.2%)という値になる。従って年代は「主部屋」から「パティオ」までの一連の建築が植民地期以降

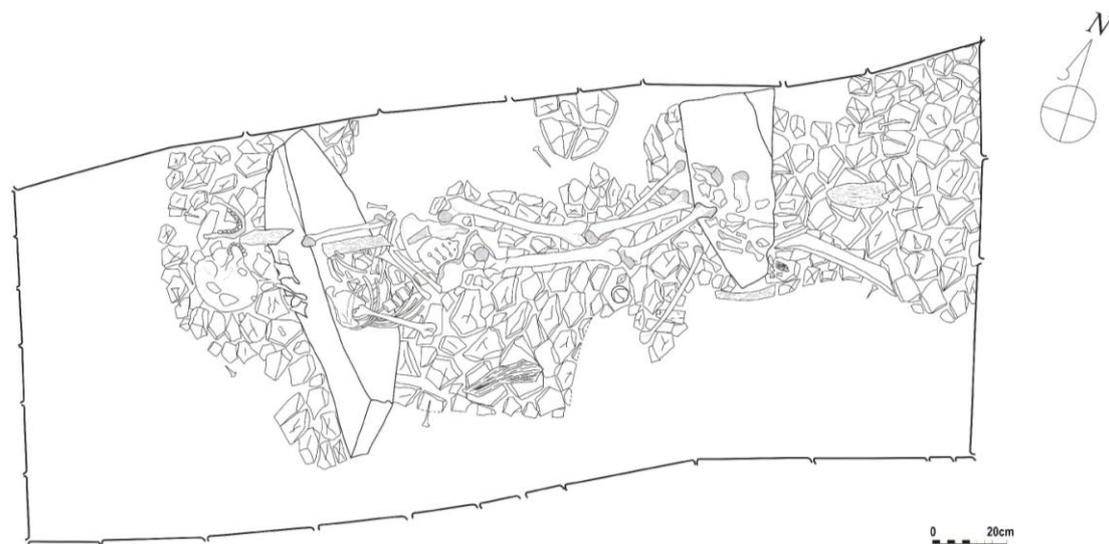


図 19 B区第4号墓(BTM4)平面図

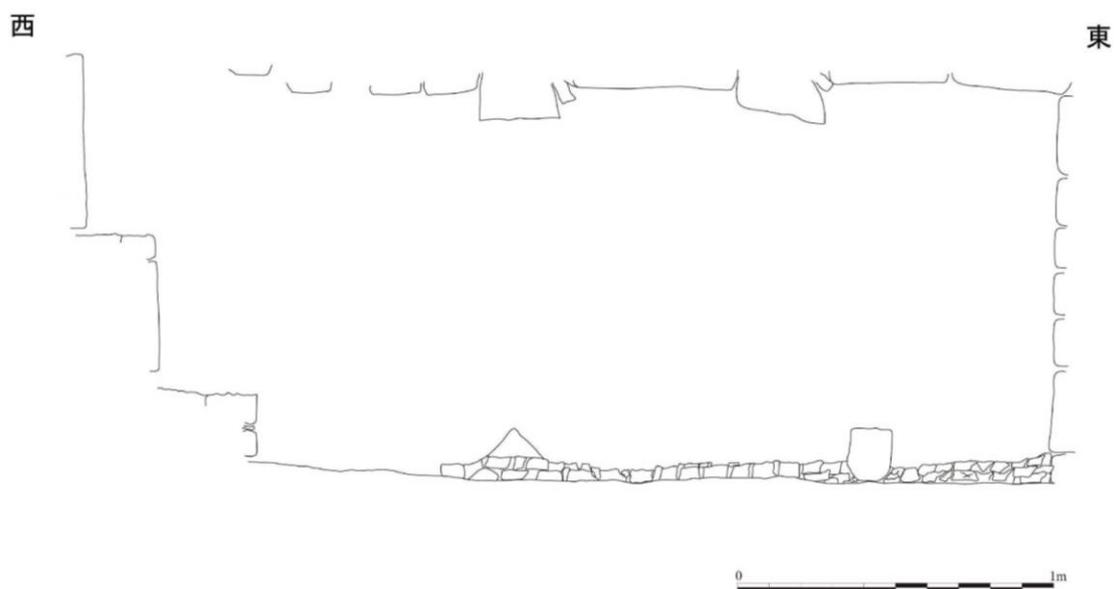


図 20 B区第4号墓(BTM4)断面図

に建設されたという解釈と矛盾しない。今後、棺桶がいつ頃ペルーに導入されたのかを植民地期の史料と照らし合わせて確認する必要がある。また、木材の樹種同定をパリオ・サーヴェイ株式会社に依頼したが、データベースにないということであるため、アジアにはないアメリカ大陸の木であろう。

BTM9(図 21 ; 図 22)



図 21(左) B区第9号墓(BTM9)

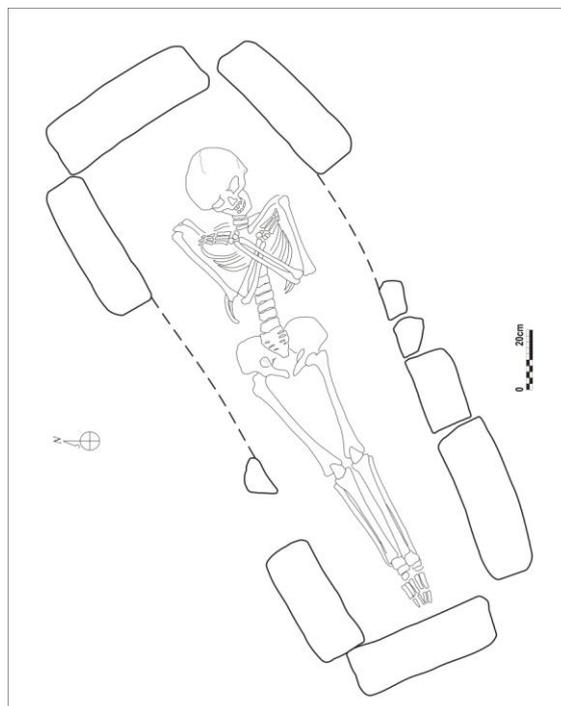


図 22(右) B区第9号墓(BTM9)平面図

「主部屋」内で確認された BTM6 と同様に、焦茶色の土のブロックで縁取られた墓坑である。回廊の北側の壁に平行に、北東—南西方向に長い。遺体は伸展葬で、頭が北東、顔はやや北西を向いていた。壮年男性で口の中にピンセット形の銅製品があった。この墓の掘り込み面は確認できないが、床面がその上を通っていないため、「回廊」の建設後に床面を掘り込んで作られた墓である可能性が高い。回廊が建設されたのは植民地期であるため、墓の建設時期もそれ以降である。

「中庭」

約 10 x 10 m の大きさの空間である。空間の中央部にある石で縁取られた直径 20 cm、深さ 50 cm の穴以外は何もないシンプルな構造である。ここから東の「オープンスペース」に直接抜けるためのステップはなく、北西コーナーの隙間を抜け北側に通じる。また、「中庭」の北に隣接する建築物は確認できない。「中庭」の外側で唯一確認された遺構は、内部が石で縁取られた直径 45 cm、深さ 40 cm の円筒形の浅い穴⁵である。つまり、ここまでで「主部屋」から連なる一連の建築は終了しているように見える。しかし念のため、これより東の部分も発掘し、建築活動がないかどうか確認作業を行った。

「オープンスペース」

壁の痕跡が認められない場所で 5 x 5 m の範囲を発掘したが、建築活動の痕跡は認められなかった。また、ここの土は粘土質の暗茶褐色で、BTM6、BTM9 を縁取る土のブロックと同様の特徴を持つことが確認された。

「見晴し場」

東に位置する小高い丘を「見晴らし場」と呼ぶ。ここからタンタリカの山、および東から西へ尾根沿いに通る道が一望できる。また、これより北、東、南は急勾配になっており、川の支流が確認できる。地表からは壁の痕跡は確認できないが、盗掘坑があり、周囲に約 1.5 x 1 m の板状の石があるため、なんらかの建築活動があったことが予想された。

発掘の結果、いくつかの壁の基礎が確認された。それ以外に土坑が 3 つ検出され、内部からカハマルカ前期(A.D. 200-600)の土器に類似した土器片が数点出土したため、この付近で先スペイン期の活動があったと考えられる。

次に先スペイン期の墓が検出された C 区について記述する。

3-2. 先スペイン期の墓——C 区の発掘

タンタリカの丘の頂上付近に人骨が散乱し、梁と思われる細長い石が散乱している箇所を確認された。そのため墓があると想定し、2000 年に発掘区を設定した。2004 年には 2000 年発掘区の隣と、さらに丘の頂上付近で発掘を実施した(渡部 2005)。2004 年の調査の結果、ばらばらの状態で人骨が検出された。明らかに二次埋葬の墓である。つまり、いったんど

⁵ A 区第 3 テラスの RA1 の中央に確認された穴の形態と類似する。先スペイン期からの建築の特徴であろう。

こかで遺体を埋め、その後骨だけを取り出して埋めたと考えられる。2004年に検出された墓の人骨の分析が未了であるため、ここでは2000年の発掘データのみを提示する。

C区にはインカ期のチュルパが1基検出された(図23; 図24)。チュルパは斜面に土留め壁を建て形成されたテラスの上に建設された部屋の中心部に位置する。テラスは5.5 x 4 mの大きさである。チュルパは小さい部屋状構造が2つ連なった構造である。R1は250 x 130 cm、R2は220 x 180 cmの大きさである。墓は荒らされていたが、R2の内部からは屈葬の遺体が少なくとも9体確認されており、集合墓であるというチュルパの特徴と合致する。この墓はCTM2と登録された。またアリバロスと呼ばれる尖底長頸壺2点、また銅製のトップ(女性の肩掛けを留めるピン)が1点出土している。遺体の1つは口の中にピンセット形の銅製品を含んでいた。

チュルパは南東側に大きさ50 x 50 cmの小窓を伴うが、その外側に棘を除かれ磨かれたスポンディルス貝、カンタロと呼ばれる形の短頸壺2点が確認された。またテラスの南隅では石で縁取られた円形の炉が検出されたが、その内部からは投槍器の一部などが出土した。さらにチュルパの外側の南東コーナーの床下からは、墓の建設の際に埋め込まれたと考えられる、黒色の碗形土器が12点出土した。

チュルパの直下には地下式の墓室が確認された。南側に入口があり、回廊を通り西に曲がり墓室に通じる構造である。墓室は2.1 x 1.24 mの広さで、高さは1.8 mある。壁龕を2つ伴っており、西側の壁龕は高さ70 cm、幅65 cm、奥行き60 cmの大きさである(図25)。北側の壁龕は損傷がひどく本来の大きさは確認できないが、奥行きは36 cmある。残念ながら内部は荒らされていたため、どのような人物が埋葬されていたのか、集合墓であったのかどうかは不明である。

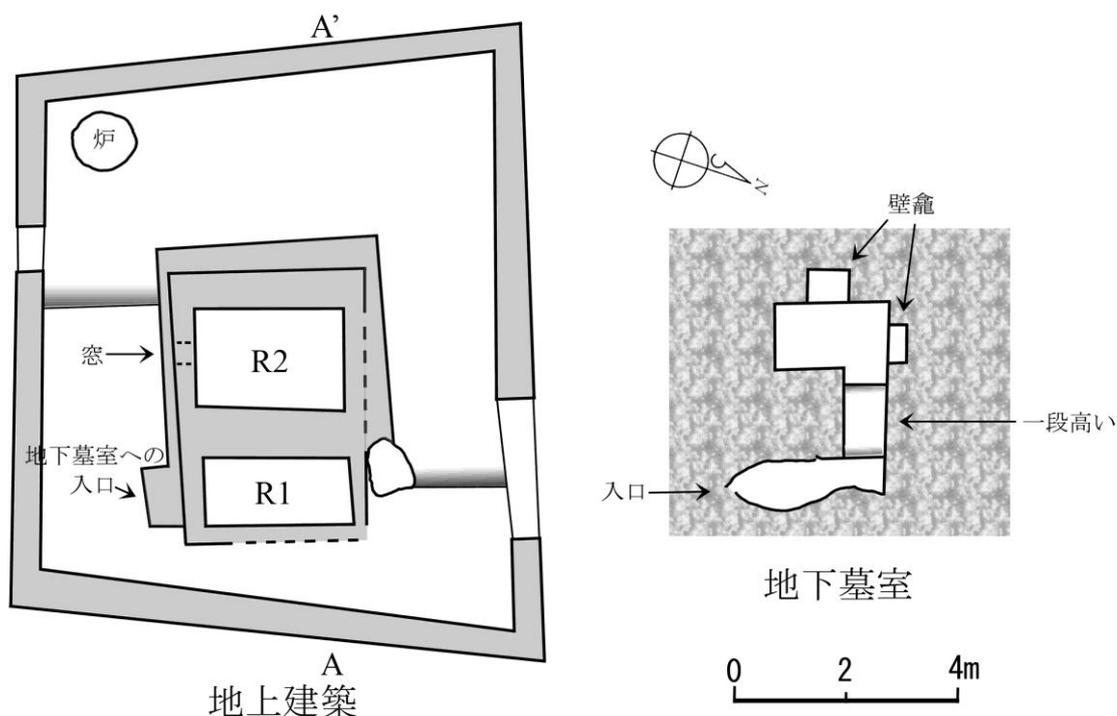


図23 タンタリカ遺跡C区の墓

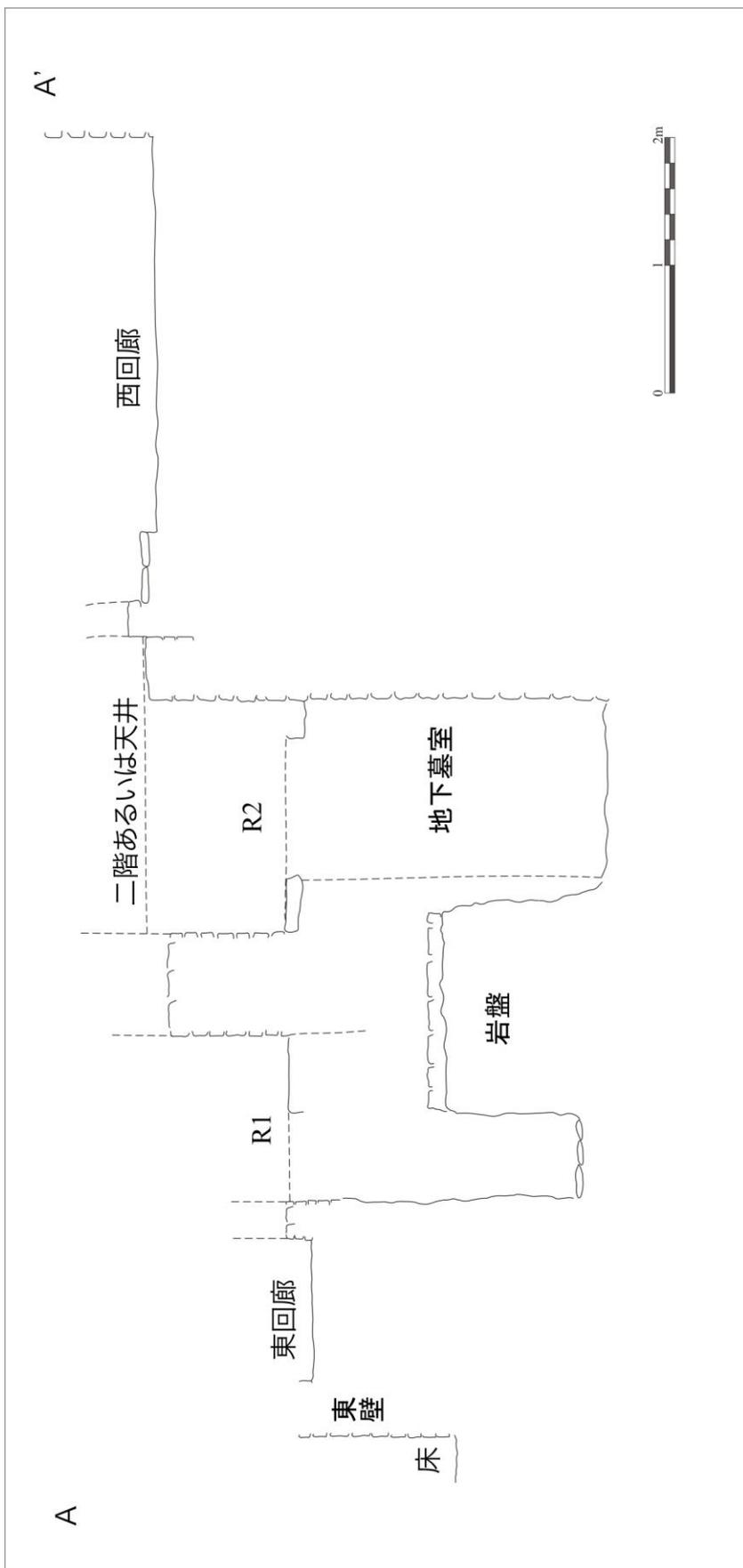


図24 タンタリカ遺跡C区墓室断面図

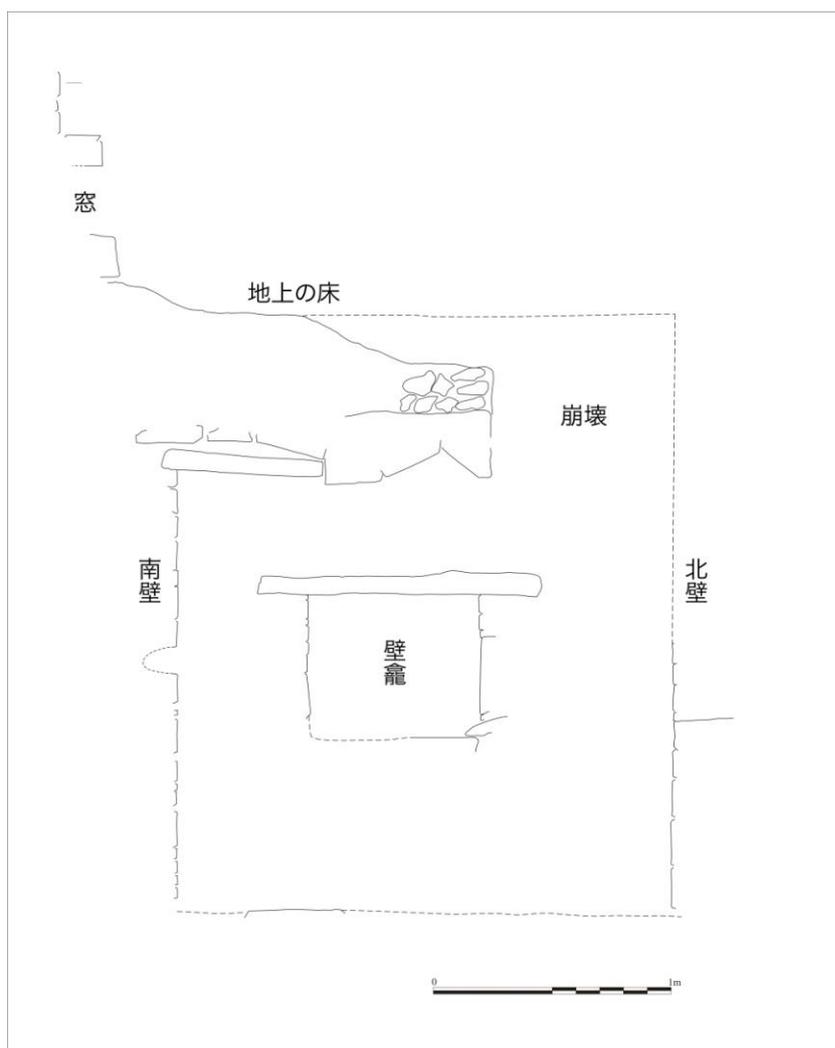


図 25 タンタリカ遺跡 C 区墓室内部西面図

墓室に通じる回廊でチム一様式の鐙形土器の破片が確認されたため、墓室はチム一期のものである可能性があり、その場合、チム一期の墓の直上にインカ期のチュルパが建設されたと解釈できる。時代は遡るが、カハマルカよりも南のカイエホン・デ・ワイラス盆地でも、前時代の地下式の墓の上にワリ期(A.D. 600-1000)のチュルパが建設されている(Lau 2000: 193, 2002: 292)。タンタリカにおけるこのような二層構造の墓が文化の連続性を強調しているのか、あるいはインカによる征服を意味しているのかは、今後の検討課題である。

4. タンタリカ遺跡の墓から検出された人骨の特徴

タンタリカ遺跡の人骨については、キリスト教受容の影響が人的な交流にも及んでいるのか、つまりスペイン人との混血が骨形態に見いだせるのか、という問題が最大の関心事であった。表 1 に B 区および C 区で検出された墓の人骨の概要を示す。

原埋葬の状態が比較的保たれていた B 区人骨からは、上顎切歯のシャベル型の強さや下肢骨に見られる蹲踞面形成など、基本的にモンゴロイド的特徴をもつ先住民系集団の存在が示唆された。しかし、男性骨の顔面部の繊細さや身長の高さに限ってみると、古代アン

デス人としてはやや異質とも言える形質が含まれている。今後、骨形態だけではなく、遺伝子的な解析を周辺地域の同時代人資料との間で進めていく必要がある。

表1 タンタリカ遺跡 B 区および C 区出土人骨の形質概要^a

墓と人骨番号 ^b	遺存部位	性	年齢 ^c	頭蓋変形	推定身長 ^d	シャベル型切歯	踵踞面	備考
BTM1	全身	?	小児(9)			軽度		
BTM2	全身	女性	壮年(25-30)	前後型?	142.0cm	強度	あり	
BTM3-1	全身	男性	壮年(25-30)	後頭型	157.2cm	中度	あり	上顎切歯部唇側の過剰歯
BTM3-2	全身	女性	壮年(25-30)	変形なし	146.2cm	中度	あり	
BTM3-3	頭蓋と大腿骨破片	?	新生児					
BTM4	全身	女性	壮年(25-30)	変形なし	150.8cm	強度	あり	側頭部の陥没骨折癒
BTM5	全身	男性	壮年(35-40)	変形なし	161.0cm		あり	
BTM6	全身	男性	壮年(25-30)	後頭型	158.3cm	強度	あり	
BTM7	頭骨を除く全身	男性	若年(18-19)		(153.4cm)		あり	体肢骨端の一部が未癒合
BTM9	全身	男性	壮年(25-30)	前後型	155.4cm	強度	あり	
CTM2-1	頭蓋破片と体肢	男性	壮年(25-30)			中度	あり	頭蓋縫合の早期癒合, 左橈骨骨折
CTM2-2	頭蓋なし, 体肢少量	男性	壮年				あり	右脛腓靭帯結合部の骨増生
CTM2-3	全身の破片	?	小児?					主要長骨の骨端が未癒合
CTM2-4	少量の破片	男性?	成人					
CTM2-5	少量の破片	男性	壮年(25-30)	周縛型?				
CTM2-6	少量の破片	女性	壮年					
CTM2-7	下顎骨と大腿骨	?	幼児(6)					
CTM2-8	下肢のみ	女性?	壮年					
CTM2-9	少量の破片	?	^e					

^a 骨形態の分析は主として Ubelaker(1989)の成書を参考にした。表中の空欄は、破損等で観察・判定不能の項目である。

^b 複数の人骨が含まれる BTM3 と CTM2 では、番号で各個体を区別している。

^c 年齢は 20 歳未満を未成年とし、歯と体肢の化骨状態で推定している。成人では 20~40 歳を壮年とし、推定可能な場合には 5 歳間隔の目安を示している。

^d Génoves(1967)の推定式に基づく。

^e 壮年女性とみられる頭蓋と頑丈な男性の上腕骨が混在している。

5. 墓と植民地時代の社会変化

墓は文化を示す指標であり、そのバリエーションは民族集団の多様性、時期的変化、社会内の役割の相違等と平行関係にある。

タンタリカ遺跡では発掘調査で確認された墓以外に、斜面の岩の間隙に作られた窓を伴う墓(図 26)、洞窟状の凹みを利用した墓(図 27)などが表面から観察できる。またタンタリカは以前ワカ・タンタリェックと呼ばれており、そこでは 18 世紀に地上にマウンド状構造物を伴う地下式の墓が発掘され、様々な金属製品が収集されている(図 28)。いずれも植民地時代ではなく、先スペイン期の墓のバリエーションの一つと考えられる。埋葬形態のバリエーションが時期差を示すのか、あるいはタンタリカに同時期に存在した人間集団の差に対応するのか、詳しいことは分からない。

インカ帝国では大規模な人間集団の移動政策が採られた。そして移住先でも頭飾りなど、それぞれの民族集団の指標を守ることが命じられた(渡部 2009)。インカ期タンタリカに多様な墓が認められるのであれば、タンタリカに複数の民族集団が存在し、それが埋葬形態の多様性と平行関係にあった可能性、つまり埋葬形態の特徴が各民族集団の指標であり、それが移動先のタンタリカでも維持された可能性を考慮する必要がある。現在、この問題を解決するのに十分なデータが揃っていないため、今後の課題としておきたい。



図 26 タンタリカ遺跡岩窟墓



図 27 タンタリカ遺跡洞窟墓

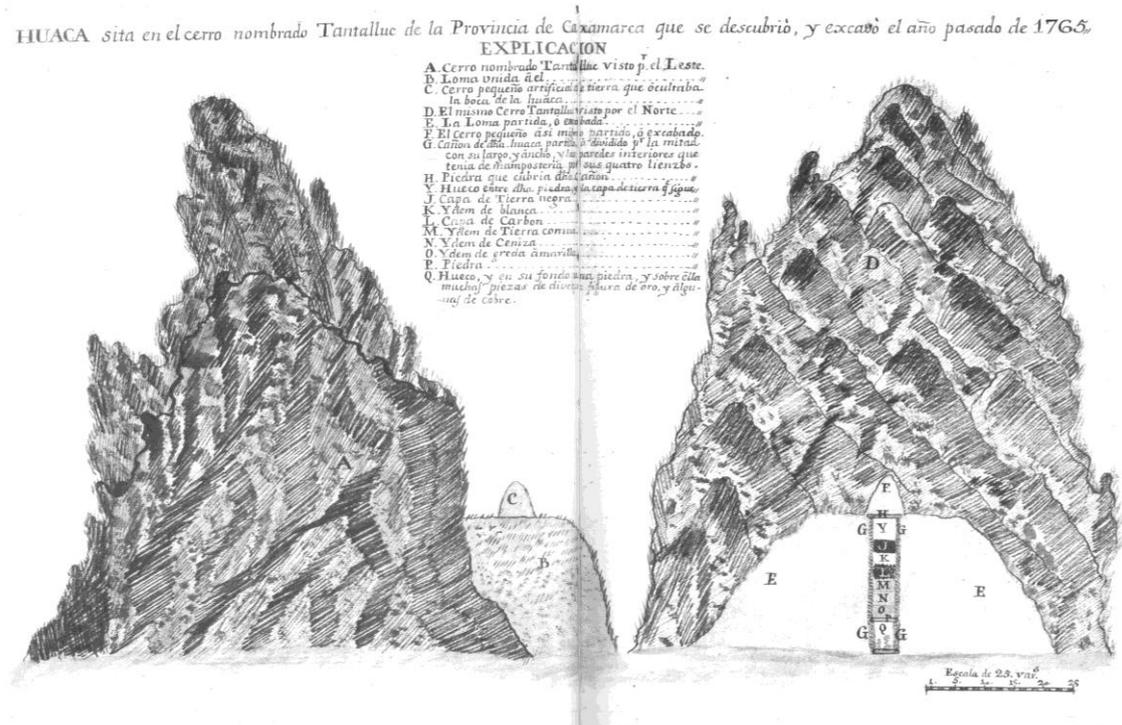


図 28 ワカ・タンタリユック (Martínez Compañón 1991(1789))

明らかなのは植民地時代における埋葬形態の変化である。征服期から植民地時代にかけて、先住民社会はそれまでにない大きな変化を被った。それが埋葬形態にも示されており、インカ期のチュルパ内の屈葬から腕を胸の前で交差させた伸展葬へ変化した。

人骨は基本的に先住民系の特徴を示しており、人間集団が置換したわけではなく、タンタリカで生活していた住民がキリスト教を受容したと考えられる。ただし、埋葬形態は完全にカトリック式ではない。ピーター・ゴースが指摘しているように、先スペイン期アンデスでは銅製品とミイラは密接な関係にあったが(Gose 1993: 505-508)、タンタリカの墓で確認された口の中にピンセット形の銅製品を入れる習慣は、植民地初期まで存続したと考えられる。

埋葬形態の変化は、副葬品の欠如にも認められる。一般に先スペイン期の墓には多くの副葬品が伴う。特に酒を入れるための壺、供え物を載せるための皿、碗形の土器が多い。そうした副葬品が植民地時代のタンタリカでは全く姿を消してしまっただけでなく、土器の特徴が全く変わってしまった(Watanabe 2006)。インカ様式をはじめとする装飾土器は一切姿を消し、無紋の土器のみが製作されるようになった。そして施釉、轆轤の使用、細かい混和材の使用など技術的变化が B 区出土の土器に顕著に認められる。新しい土器製作技術が導入されたが、ティナハと呼ばれる大型瓶やカンタロと呼ばれる短頸壺など器形の一部は、少数ではあるが植民地時代まで連続的に引き継がれた。銅製品の利用や一部の土器の器形など、先スペイン期からの連続性に、後に民衆カトリシズム(フォーク・カトリシズム)と呼ばれることになる習合の特徴の萌芽を見いだすことができる。

アンデス地域は 16 世紀にスペインの植民地となった。キリスト教の受容に伴い、埋葬形態をはじめとする先住民の文化的要素が変化した。しばしば人類学では伝統という言葉で、土着と想定される文化を括るが、アンデスの住民がキリスト教を受容しても頑なに守った

ものは何か。あるいは意識せずとも継続していった特徴は何か。口の中のピンセット形銅製品、一部の土器の器形など、発掘データに認められるわずかな断片をつなぎ合わせ、考古学データと植民地時代の残された記録をつきあわせ、丹念に明らかにしていくことが必要である。

BTM4 の立派な構造の墓室で棺桶に安置されていた遺体は女性で、ボタンを伴うことからスペイン式の服装をしていた。他の簡素な土坑墓に埋葬されていた男性とは扱いが異なることは明らかである。それはなぜなのか。先スペイン期(インカ期)から植民地時代に連続して共同体をとりまとめた首長の配偶者や家族だったのか、あるいはスペイン人に取り立てられた特別な女性であったのか。通常スペイン人征服者は男性であり、征服の過程で先住民女性との間で混血が進んでいった。植民地時代初期における先住民の男性と女性の区別が、埋葬形態の違いと平行関係にあるのかどうか、今後の課題である。

また BTM8 では、墓坑のみが確認されており、中に遺体はなかった。通常誰かが亡くなってから墓が作られたと考えるのが普通であるが、あらかじめ準備されていた墓が何らかの理由で使用されなかったのであろうか。もう一つ考えられるのは、いったん埋められた遺体が掘り起こされたという可能性である。

植民地期にはキリスト教の普及に伴い、先スペイン期のチュルパや洞窟へ遺体を安置することが禁止され、教会の墓地に埋葬することが強制された。ところが、先住民はいったん遺体を埋めるも、泣いているから、苦しんでいるからという理由で遺体を掘り出して、再び先住民の墓地であるチュルパや洞窟に移動させたということが記録されている(アリアーガ 1984(1621))。先スペイン期アンデスの先住民にとって、ミイラ製作に現れるように、生と死は完全に分断されるのではなく、墓地が離れているとはいえ、少なくとも理念上は連続的に繋がっていたのである。

スペイン人による征服活動は、無知蒙昧な先住民にキリスト教を布教するという大義名分のもとに遂行され、征服には神父が同行した。こうした布教の過程については、主に文書に依拠した研究が進められてきた(*cf.* 齋藤 1993)。タンタリカ遺跡で確認された一連の建築、墓は、キリスト教受容過程を具体的に裏付ける貴重な発掘データである。

放射性炭素年代によれば、タンタリカの人々は植民地時代の早い時期にキリスト教を受容していたことが分かる。ペルー北部は、地理的にスペイン人がアンデスに入る入口であったため社会変化が南部に比べて急速に進んだし、特に海岸地帯では先住民人口減少が激しかった。先述したようにタンタリカ遺跡は山地にありながら海岸地帯と密接な関係にあったことが、キリスト教の布教がスムーズに行われた一つの要因であろう。

では一体タンタリカ遺跡の山の麓に建設された一連の建造物は何であろうか。先スペイン期のアンデスの人々は、それぞれの集団の祖先が出てきたとされる場所をパカリナと呼び崇拝し、その周辺に居住していた。その単位はケチュア語でリャクタと呼ばれ、それはスペイン語で「プエブロ(村)」と訳された。リャクタは、例えばカハマルカ地方では500以上あった(Ramírez 2002: 33)。つまりかなり散在していた。その後、キリスト教の布教と納税の効率化を図るためレドゥクシオン政策によって、散在していたリャクタに生活していた先住民が、スペイン式に区画された設計の村に集住させられた。レドゥクシオン政策は第5代ペルー副王フランシスコ・デ・トレドの時代に、1572年から本格的に進められたが、それ以前にもそうした政策が実験的に採られた場所があり、その一つがカハマルカであった。カ

ハマルカ地方の最初のコレヒドール(国王から任命された地方官僚)であるファン・デ・フェンテスと、フランシスコ会の司教ファン・ウルタードの主導により、1565年にはレドゥクシオン政策が試みられた(Espinoza Soriano 1986(1977): 121, 1986(1973): 158)。それが実際にもたらした結果については明らかになっていないが、タンタリカ遺跡の麓の建築群がレドゥクシオン政策によって設定された集住村の一つであったという可能性を検討する必要がある。しかしたとえそうであったとしても、一連の建築は建設途中で放棄されたようであり、その試みは失敗に終わったようだ。

5. おわりに

本稿は墓を中心とした考古学データに基づき、植民地時代アンデスに生じた変化について考察した。これまで主に史料に基づきアプローチされてきたテーマであるが、物質的証拠の提示により、キリスト教布教の実態、土器の変化、建築の特徴などをより視覚的に、具体的に再現できる。とはいえ類似した考古学データが蓄積されているとは言い難く、まだ断片的なデータに過ぎない。植民地時代の遺跡調査は多くないため、さしあたってすべきことは、考古学データからの問題提起を受け、植民地期の先住民社会の変容に関する史料を読み直すことである。

ヨーロッパ社会との接触による非西欧社会の変容は、人類学において頻繁に扱われてきたテーマであるし、16世紀のスペインとアンデス社会の関係もその一つとして捉えることができよう。人類学的研究を踏まえアンデス植民地時代を捉え直し研究の新たな方向性を見出すこと、また逆に、アンデスの事例から他の地域にも応用できるような汎用性のある議論を展開することが今後の課題である。

参考文献

網野 徹哉

2008 『インカとスペイン—帝国の交錯』、講談社。

アリアーガ, パブロ・ホセ・デ

1984(1621) 「ピルーにおける偶像崇拜の根絶」(増田義郎訳)、『ペルー王国史』、大航海時代叢書第II期 16、pp. 363-606、岩波書店。

Bronk Ramsey, C.

1995 “Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program,” *Radiocarbon* 37-2: 425-430.

2001 “Development of the Radiocarbon Calibration Program OxCal,” *Radiocarbon* 43-2A: 355-363.

2006 “OxCal v. 4.0.1.”

Burger, R. L. and L. C. Salazar (ed.)

2003 *The 1912 Yale Peruvian Scientific Expedition Collections from Machu Pichu: Human and Animal Remains*, Department of Anthropology, Yale University, Division of Anthropology, Peabody Museum of Natural History, New Haven.

- Cobo, B.
1964(1653) *Historia del Nuevo Mundo*. Biblioteca de Autores Españoles, vols. 91-92, Ediciones Atlas, Madrid.
- Espinoza Soriano, W.
1986(1973) “La pachaca de Puchu en el reino de Cuismanco, Siglo XV y XVI,” In F. Silva Santisteban, W. Espinoza Soriano & R. Ravines (ed.) *Historia de Cajamarca 2: Etnohistoria y Lingüística*, pp. 151-182, Instituto Nacional de Cultura – Cajamarca, Corporación de Desarrollo de Cajamarca, Cajamarca.
1986(1977) “La pachaca de Pariamarca en el reino de Caxamarca, siglos XV-XVIII,” In F. Silva Santisteban, W. Espinoza Soriano & R. Ravines (ed.) *Historia de Cajamarca 2: Etnohistoria y Lingüística*, pp. 113-148, Instituto Nacional de Cultura – Cajamarca. Corporación de Desarrollo de Cajamarca, Cajamarca.
- Génoves, S.
1967 Proportionality of the Long Bones and Their Relation to Stature among Mesoamericans, *American Journal of Physical Anthropology* 26-1: 67-77.
- Gose, P.
1993 “Segmentary State Formation and the Ritual Control of Water under the Incas,” *Comparative Studies in Society and History* 35-3: 480-514.
- Hampe Martínez, T.
1982 “Las momias de los incas en Lima,” *Revista del Museo Nacional* 46: 405-418.
- Haun, S. J. & G. A. Cock Carrasco
2010 “A Bioarchaeological Approach to the Search for Mitmaqkuna,” In M. A. Malpass and S. Alconini (ed.) *Distant Provinces in the Inka Empire: Toward a Deeper Understanding of Inka Imperialism*, pp. 193-220, University of Iowa Press, Iowa City.
- Instituto Nacional de Cultura – Cajamarca
1997 *Defensa, Conservación y Levantamiento Topográfico del Monumento Arqueológico Tantarica - Contumazá*, Informe - I etapa, Instituto Nacional de Cultura - Cajamarca, Cajamarca.
- Isbell, W. H.
1997 *Mummies and Mortuary Monuments: A Postprocessual Prehistory of Central Andean Social Organization*, University of Texas Press, Austin.
- Julien, C. J.
2004 “Las tumbas de Sacsahuaman y el estilo Cuzco-Inca,” *Ñawpa Pacha* 25-27(1987-1989): 2-125.
- Lau, G. F.
2000 “Espacio ceremonial Recuay,” In K. Makowski Hanula (ed.) *Los Dioses del Antiguo Perú*, pp. 178-197, Banco Crédito del Perú, Lima.
2002 “Feasting and Ancestor Veneration at Chinchawas, North Highlands of

- Ancash, Peru,” *Latin American Antiquity* 13-3: 279-304.
- Mackey, C.
2010 “The Socioeconomic and Ideological Transformation of Farfán under Inka Rule,” In M. A. Malpass and S. Alconini (ed.) *Distant Provinces in the Inka Empire: Toward a Deeper Understanding of Inka Imperialism*, pp. 221-259, University of Iowa Press, Iowa City.
- Martínez Compañón, B. J.
1991(1789) *Trujillo del Perú, vol. IX*, Agencia Española de Cooperación Internacional, Madrid.
- McCormac, F. G., A. G. Hogg, P. G. Blackwell, C. E. Buck, T. F. G. Higham and P. J. Reimer
2004 “SHCal04 Southern Hemisphere Calibration, 0-11.0 cal kyr BP,” *Radiocarbon* 46-3: 1087-1092.
- Moore, J. D. and C. J. Mackey
2008 “The Chimú Empire,” In H. Silverman & W. H. Isbell (ed.) *Handbook of South American Archaeology*, pp. 783-807, Springer, New York.
- ピサロ、ペドロ
1984(1571) 「ペルー王国の発見と征服」(増田義郎訳)、『ペルー王国史』、大航海時代叢書第II期16、pp. 1-297、岩波書店。
- Ramírez, S. E.
2002 “Don Melchior Caruarayco: A Kuraka of Cajamarca in Sixteenth-Century Peru,” In K. J. Andrien (ed.) *The Human Tradition in Colonial Latin America*, pp. 22-34, Scholarly Resources, Wilmington.
- 齋藤 晃
1993 『魂の征服——アンデスにおける改宗の政治学——』、平凡社。
- Ubelaker, DH.
1989 *Human Skeletal Remains*, 2nd Ed, Traxacum, Washington D.C.
- Watanabe, S.(渡部森哉)
2004 “El reino de Cuismanco: orígenes y transformación en el Tawantinsuyu,” *Boletín de Arqueología PUCP* 6 (2002): 107-136.
2005 「ペルー北部高地、タンタリカ遺跡第三次発掘調査—2004年—」『古代アメリカ』8: 51-70.
2006 “La función ritual de la cerámica prehispánica: el caso de Tantarica, sierra norte del Perú,” Paper presented at the 52º Congreso Internacional de Americanistas, Universidad de Sevilla, 2006.07.17.
2007a 「ペルー北部高地、パレドネス遺跡の発掘調査—2006年—」『古代アメリカ』10: 67-98.
2007b 「インカ国家における地方支配——ペルー北部高地カハマルカ地方の事例——」『国立民族学博物館研究報告』32-1: 87-144.
2009 「インカ帝国における多民族・多文化状況」、浅香幸枝(編)『地球時代の多文化共

生の諸相：人が繋ぐ国際関係』、pp. 197-218、行路社。

2010 『インカ帝国の成立——先スペイン期アンデスの社会動態と構造』、春風社。

Social Change in the Colonial Period from the Perspective of Funeral Patterns: A Case Study of the Tantarica Archaeological Site in the Northern Highlands of Peru

Shinya Watanabe

Kazuharu Mine

The Inca Empire that rose to domination in the Andean region was conquered by the Spanish in the 16th century. Along with Spanish dominion the same period saw the advance of Christian evangelization. In this article we examine the effect of evangelization among the Andean native people, as evidenced in data from archaeological excavation of the Tantarica site in the Northern Highlands of Peru. During the Inca period, *chullpas*, tower-shaped tombs containing curled-up mummies are found throughout the Andean highlands. Buried with the mummies were ceramic ware and other items. However from the early colonial period we see a “Christian-style” of burial emerging, in which the body is stretched out and the arms are crossed on the chest. The earlier custom of placing a copper object in the mouth is retained, but other funerary items such as ceramic ware disappeared. Skeletal structure of the mummies resembles that of natives of the Andean region, rather than that of Spanish colonizers, so we may surmise that they had converted to Christianity. In the early colonial period more rapid social change can be observed in the coastal areas than in the highlands. Tantarica was constructed by peoples from the coastal area who had migrated there, which facilitated the spread of Christianity. Study of data from other sites and early colonial documents will be necessary to confirm our suggestions.

Keywords

Andes, Peru, Inca Empire, Spain, Colonial Period, Tomb, *Chullpa*, Christianity